

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32643

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23310

研究課題名（和文）高校の過程を通じた学校間進路格差の形成メカニズムの実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study of the Formation Mechanisms of Inter-School Career Gaps through the High School Process

研究代表者

山口 泰史（Yamaguchi, Yasufumi）

帝京大学・公私立大学の部局等・助教

研究者番号：10846124

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、人々が学校教育を通じてどうやってそれぞれの社会経済的地位に分かれてゆくのか、という大きな問いに答えるべく、高校生の進路選択プロセスに着目して、高校の過程を通じた進路の学校間格差の形成メカニズムの解明を目指してきた。高校入学前から卒業時までの情報を得られるパネル調査の2次分析、および高校教員へのインタビュー調査の実施・分析を通じて、高校生の間の進路形成時期や価値観形成における差異などを通じて、学校間格差、また社会経済的な背景（家庭の経済的文化的状況や性別など）に基づく進路格差が生じることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、高校生の進路選択において、性別や家庭背景などの属性的要因がどのような重要度合いをもって影響しているのか、また進路選択時期の違いが卒業後進路をどう左右するのか、社会観と進路希望ないしは決定進路はどのような関係性にあるのかを、今日までに明らかにしてきた。これらの知見は、学校現場でおこなわれる進路指導において、どのような属性や時期に留意して指導をおこなえば、卒業後進路における有利不利を生じさせにくいかを考える上で有用だと言える。加えて、高校生への進路指導やキャリア教育に関するこれまでの政策や教育改革の成否に対して、（直接的に成否を明らかにするものではないにせよ）一定の示唆を与える。

研究成果の概要（英文）：In order to answer the big question that how people are divided into different socioeconomic statuses through schools, this study has focused on the career choice process of high school students and has sought to elucidate the formation mechanism of inter-school differences in career paths throughout the high school process. Through secondary analysis of a panel survey that provides information from before high school entrance to graduation, and through the implementation and analysis of interviews with high school teachers, I have found that differences between schools, as well as those in career paths based on socioeconomic background (such as family economic and cultural status and gender) mediate. The study revealed that disparities in career paths arise based on socioeconomic backgrounds (e.g., family economic and cultural status and gender).

研究分野：教育社会学

キーワード：高校生の進路選択 進路選択過程 パネルデータ分析 インタビュー調査

1. 研究開始当初の背景

人々は学校教育を通じて、どうやってそれぞれの社会経済的地位に分かれてゆくのか。この問いを解明する上で、高校という学校段階の役割を明らかにすることは重要だと考えられてきた。日本では1970年代に高校全入の時代を迎える頃から、学校による生徒の進路に対する水路づけトラッキングという概念を用いた検討が重ねられてきた。そこでは、学科や学力ランクに基づいて学校間に階層性が存在し、そのような学校階層構造と卒業後進路が一定の対応関係にあること、またそのような対応関係の形成において、入学者層(インプット)や学校と進路の制度的結びつき(アウトプット)の違いだけではなく、進路選択過程での生徒の変化(スループット)も重要な役割を果たしている可能性が指摘されてきた。

ところが、実際のところ、そのような進路選択“過程”についての実証的検討は、日本では十分におこなわれてきたとはいいがたい。これは、そのような検討をおこなうためには高校生の複数時点で調査して情報を得る必要があり、地域や学校のタイプを限定した上でならばまだしも包括的に日本全国の実態を調査するのが難しいことが背景の1つとして考えられる。このことに加えて、日本の高校生調査は学校を通しておこなわれることが多かったため、生徒の社会的な背景を中心とした家庭状況についての情報が十分に得られない場合が大半を占める。そのため、入学時点での生徒の差異を考慮した上で、高校生の進路形成を中心とした変化の過程を明らかにすること、またそのような変化の過程に社会経済的背景がどのように影響を及ぼすのかを明らかにすることが難しかった。

2. 研究の目的

上述のような研究背景を踏まえて、本研究では、日本の高校生の進路選択過程に着目して、社会経済的地位の階層化に対する学校教育の影響メカニズムを実証的に解明することを目指した。

3. 研究の方法

2つの方法を用いた。第一に、パネルデータである「子どもの生活と学びに関する親子調査」(東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所)の二次分析を通じて、入学者の差異を考慮した上での進路選択プロセスの実証的検討をおこなった。第二に、高校の過程において生徒の進路が分化していく状況を丁寧かつ適切に捉えるために、高校教員に対するインタビュー調査を実施した。もっとも、新型コロナウイルス感染症の流行の影響で、後者については当初の目標数の約半数にとどまった。

4. 研究成果

本研究課題の採択期間終了時点での研究成果は以下の3点にまとめられる。

(1) 高校生の進路選択の規定構造の整理

高校生の進路選択に対して、社会経済的背景(具体的には、世帯年収などを指標とする経済階層や、親学歴や蔵書数などを指標とする文化階層)や性別、学力、職業希望などが影響を及ぼしていることが旧来指摘されてきた。加えて、近年ではそれらの複合的な影響の存在、たとえば出身階層が持つ影響力が性別や学力によって異なることが指摘されている。もっとも、性別や所属する学校のタイプ(普通科か専門学科か、進学校か非進学校か、など)によって、一変数の影響度合いの強弱だけでなく進路選択の規定構造自体が異なりうるなかでは、そのような複合的な変数間の関係性を整理できるモデルと手法を用いて分析をおこなう必要があった。本研究においては、決定木分析と呼ばれる手法を用いて上述のパネル調査データを分析することで、高卒後進路の規定構造における、高校の学校タイプ(本研究では進学校、普通科非進学校、専門高校に分類した)の影響力はきわめて大きく、それぞれの学校タイプ別に分かれたなかで、とくに進学校とそれ以外で社会経済的背景や学力が進路選択に影響する構造自体が異なっていることが明らかになった。

(2) 進路選択時期における差異を通じた教育達成の階層差の形成メカニズムの示唆

四年制大学進学率が50%を超え、高校卒業後の進路として大学が主流となるなか、学力形成や金銭的な工面など進学に向けた準備のことを考えれば、大学進学希望を形成する時期が早いほうが、実際に大学、そのなかでも難関大学に進学しやすいことが想像される。また、進路選択をおこなうためには資源や情報獲得の手段が必要であることを考えれば、社会経済的背景の違いが大学進学希望の形成時期に影響していることも予想できる。このような大学進学希望の形成時期の違いを媒介項とした教育達成の階層差形成メカニズムがあるかどうかは、進路指導をおこなう教育現場にとっても重要な示唆を与えることになると思われる。しかしながら、このようなメカニズムの有無を検証するためにはパネルデータを用いる必要があるためか、これまで実証的に検討されてこなかった。そこで本研究では上述のパネル調査データを用いた検証をおこない、そのようなメカニズムの存在を示唆する結果を得た。大学進学希望の形成時期を通じた

教育達成の階層差形成ルートは、教育達成の階層差形成メカニズム全体のうちの約 2 割を占める可能性を本研究では示した。また、このような知見は、本研究で実施した高校教員に対するインタビューでの聞き取り内容からも裏付けられるものであった。

(3) 高校における社会観形成を通じた、教育達成の階層差形成メカニズムの示唆

高校は旧来、将来の職業、ひいては社会経済的地位の違いと強く結びついていることもあって学力や進路希望のみならず生徒文化や社会観なども分化させる役割を果たしていることが明らかにされてきた。本研究では、そのなかでも社会観、とくに学歴主義的な社会イメージの(高校生の中に生じる) 分化が社会経済的背景と卒業後進路の関連を媒介している可能性を実証的に検討した。もっとも、仮にクロスセクションデータを用いた分析をおこなう場合、学歴主義的な社会イメージと進路の関連は、学歴主義的な社会イメージが形成されたから大学進学を選択したのか、大学進学希望が定まったためにそれを踏まえて学歴主義的な社会イメージを持つようになったのか、という相対する因果の向き両方の可能性があり、それらを選り分けて議論できない。本研究では、交差ラグ効果モデルと呼ばれる計量的手法を用いることで、因果の向きをより明確に議論することを試みた。分析の結果、男性では上述のような学歴主義的な社会イメージに媒介された社会経済的背景と進路の関係性が見られるのに対し、女性ではそのような媒介を通じた関係性が見られるわけではないことがわかった。また、このような知見は、本研究で実施した高校教員に対するインタビューでの聞き取り内容からも裏付けられるものであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山口泰史	4. 巻 27
2. 論文標題 社会階層および高校間進路格差の形成過程－学歴主義的社会イメージに着目して－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 子ども社会研究	6. 最初と最後の頁 119-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山口泰史	4. 巻 1
2. 論文標題 コロナ禍における中高生の入試に対する不安と進路選択の意向 中学3年生、高校3年生の回答から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学び」共同研究プロジェクト調査報告書『コロナ禍における学びの実態－中学生・高校生の調査にみる休校の影響－』	6. 最初と最後の頁 83-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山口泰史	4. 巻 23
2. 論文標題 高校在学時を起点とするパネル調査における初期標本脱落とバイアスの補正 「東大社研・高卒パネル調査」を事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会と調査	6. 最初と最後の頁 66-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yasufumi Yamaguchi
2. 発表標題 Estimating the effects of educational tracking on students' learning: Evidence from JLSCP 2015-2018 (Japan data)
3. 学会等名 2021 SLLS INTERNATIONAL ONLINE CONFERENCE（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山口泰史
2. 発表標題 高校における学習意識・行動の分化はどこから生じるか 高1・高3の2時点データを用いた実証検討
3. 学会等名 日本子ども社会学会第26回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐藤香・山口泰史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 328
3. 書名 子どもの学びと成長を追う : 2万組の親子パネル調査から	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------